



北区（全年度）出土金属製品



（全年度）出土石製品



（全年度）出土骨製品



2853



2858



2863



2852



2857



2862



2851



2856



2861



2850



2855



2860



2849



2854



2859

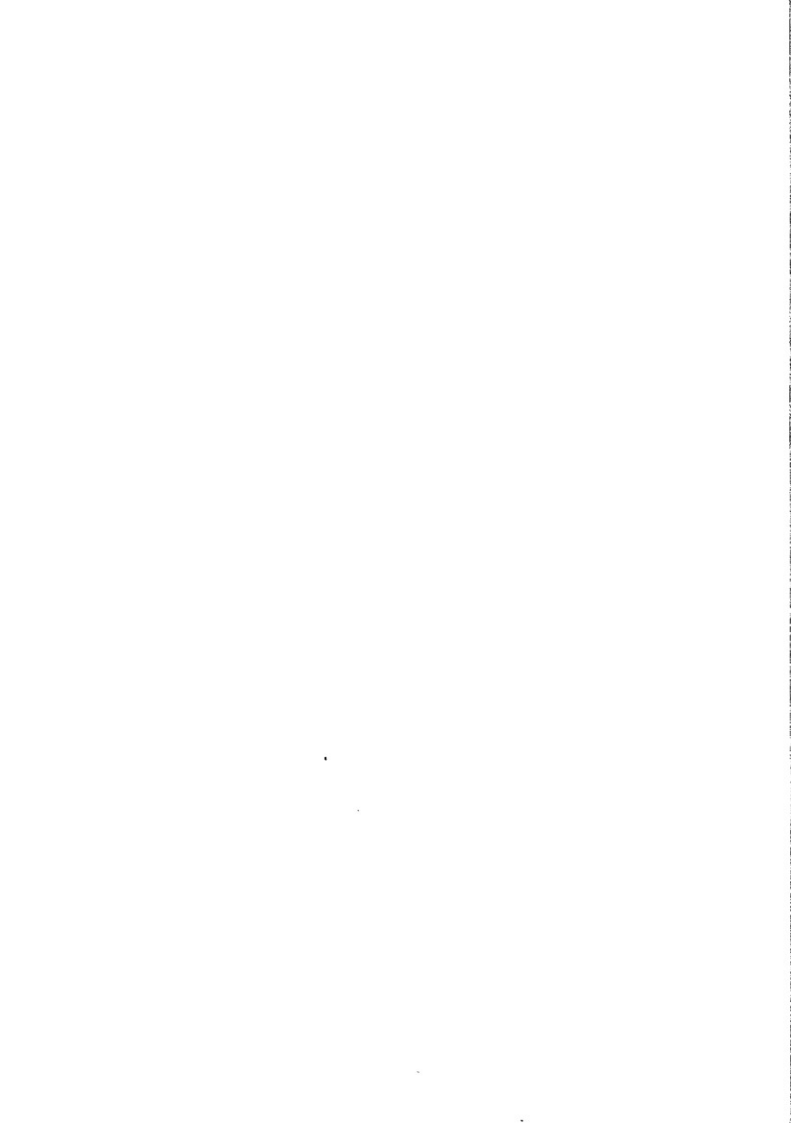
(全年度) 出土銭貨

# 自然科学分析等

徳島県観音寺遺跡における樹種同定 株式会社 古環境研究所

観音寺遺跡出土の動物遺体 国立歴史民俗博物館 西本豊広

徳島県内出土の日本古代銭貨 大阪市立大学 柴原永遠男



# 徳島県観音寺遺跡における樹種同定

株式会社古環境研究所

## 1. はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質から、概ね属レベルの同定が可能である。木材は、花粉などの微化石と比較して移動性が少ないことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては、木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

## 2. 試料

試料は、観音寺遺跡より出土した舟形、甬串、人形、馬形、鳥形、刀形、紡織具形、陽物形、剣形、鐵形などの祭祀具、曲物底板、高杯、挽物（皿）、槽の容器、善木、火付棒、火鑽板、自在、把手、腰掛などの雑具、杓子、匙、箸、俎板の食事具、弓の武器、檜扇、櫛、下駄の服飾具、糸巻横木、糸巻棒木、紡輪、中筒の紡織具、天秤棒の運搬具、独楽、琴柱の遊戯具、編棒、編台、馬鋏、馬鋤、木鋤、田下駄の農具、櫛の漁具、有頭棒、鑿柄などの工具、杭、部材、柱などの木材100点である。

## 3. 方法

カミソリを用いて試料の新鮮な横断面（木口と同義）、放射断面（柁目と同義）、接線断面（板目と同義）の基本三断面の切片を作製し、生物顕微鏡によって40～1000倍で観察した。同定は、解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

## 4. 結果

結果を表6に示し、主要な分類群の顕微鏡写真を図版に示す。以下に同定の根拠となった特徴を記す。

### モミ属 *Abies* マツ科 図版68-5

仮道管と放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行は比較的緩やかである。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は小型のスギ型で1分野に1～4個存在する。放射柔細胞の喉が厚く、じゅず状末端壁を有する。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質よりモミ属に同定される。モミ属は日本に5種が自生し、その内ウラジロモミ、トドマツ、シラビソ、オオシラビソの4種は亜寒帯に分布し、モミは温帯を中心に分布する。常緑高木で高さ45m、径1.5mに達する。材は保存性が低く軽軟であるが、現在では多用される。

### トガサワラ *Pseudotsuga japonica* Beissn. マツ科 図版67-1

仮道管、放射柔細胞、放射仮道管および垂直、水平両樹筋道を取り囲むエビセリウム細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行は比較的急で、正常垂直樹脂道が見られる。

放射断面：放射組織には、放射柔細胞と放射仮道管が存在する。放射柔細胞の分野壁孔はトウヒ型で、1分野に3～5個存在する。また仮道管の内壁には、水平に近いらせん肥厚が密に存在する。

接線断面：放射組織は単列であるが、水平樹脂道を含むものは紡錘形を呈する。仮道管の内壁には密に並ぶらせん肥厚が見られる。

以上の形質よりトガサワラに同定される。トガサワラは、現在では本州（紀伊半島）、四国（高知県）の深山のごく限られた地域に自然分布する。常緑高木で通常高さ20～30m、径60～80cmである。材は建築、船、器具、上木などに用いられる。

#### ツガ属 *Tsuga* マツ科 図版67-2

仮道管、樹脂細胞、放射柔細胞及び放射仮道管から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行は急である。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は、スギ型でややヒノキ型の傾向を示し、1分野に2～4個存在する。放射仮道管が存在し、その壁には小型の有縁壁孔が存在する。わずかではあるが、樹脂細胞が存在する。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質よりツガ属に同定される。ツガには、ツガ、コマツガがあり、本州、四国、九州に分布する。常緑高木で通常高さ20～25m、径50～80cmである。材は耐朽性、保存性ともに中庸で、建築、器具、土木、薪炭などに用いられる。

#### マツ属複雑管束亜属 *Pinus* subgen. *Diploxylon* マツ科 図版67-3

仮道管、放射柔細胞、放射仮道管及び垂直、水平樹脂道を取り囲むエビセリウム細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行は急で、垂直樹脂道が見られる。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は窓状である。放射仮道管の内壁には鋸歯状肥厚が存在する。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型であるが、水平樹脂道を含むものは紡錘形を呈する。

以上の形質よりマツ属複雑管束亜属に同定される。マツ属複雑管束亜属には、クロマツとアカマツがあり、どちらも北海道南部、本州、四国、九州に分布する。常緑高木で、材は水湿によく耐え、広く用いられる。

#### スギ *Cryptomeria japonica* D.Don スギ科 図版68-6

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行はやや急で、晩材部の幅が比較的広い。樹脂細胞が見られる。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は典型的なスギ型で、1分野に2個存在するものがほとんどである。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、10細胞高以下のものが多い。樹脂細胞が存在する。

以上の形質よりスギに同定される。スギは本州、四国、九州、屋久島に分布する。日本特産の常緑高木で、高さ40m、径2mに達する。材は軽軟であるが強靱で、広く用いられる。

コウヤマキ *Sciadopitys verticillata* Sieb. et Zucc. コウヤマキ科 図版68-4

仮道管と放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行は比較的ゆるやかで、晩材部の幅は狭い。

放射断面：放射柔細胞の、分野壁孔は窓状である。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、1~15細胞高であるが多くは10細胞高以下である。

以上の形質よりコウヤマキと同定される。コウヤマキは福島県以南の本州、四国、九州に分布する。

日本特産の常緑高木で、通常高さ30m、径80cmに達する。材は木理通直、肌目緻密で強靱であり、耐朽性、耐湿性ともに高い。特に耐水湿材として用いられる。

ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* Endl. ヒノキ科 図版68-7・8、69-9

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。

横断面：早材から晩材への移行はゆるやかで、晩材部の幅はきわめて狭い。樹脂細胞が見られる。

放射断面：放射柔細胞の分野壁孔は、ヒノキ型で1分野に2個存在するものがほとんどである。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型で、1~15細胞高である。

以上の形質よりヒノキと同定される。ヒノキは福島県以南の本州、四国、九州、屋久島に分布する。

日本特産の常緑高木で、通常高さ40m、径1.5mに達する。材は木理通直、肌目緻密で強靱であり、耐朽性、耐湿性ともに高い。良材であり、建築など広く用いられる。

ヤナギ属 *Salix* ヤナギ科 図版69-10

横断面：小型で丸い、放射方向にややびた道管が、単独あるいは2~3個放射方向に複合し、散在する散孔材である。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、道管相互の壁孔は交互状で密に分布する。放射組織は異性である。

接線断面：放射組織は、単列の異性放射組織型である。

以上の形質よりヤナギ属に同定される。ヤナギ属は落葉の高木または低木で、北海道、本州、四国、九州に分布する。

ツブラジイ *Castanopsis cuspidata* Schottky ブナ科 図版69-11

横断面：年輪のはじめに中型から大型の道管が、やや疎に数列配列する環孔材である。晩材部で小道管が火炎状に配列する。放射組織は、単列のものと集合放射組織が存在する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなり、同性放射組織型である。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと集合放射組織が存在する。

以上の形質よりツブラジイに同定される。ツブラジイは関東以南の本州、四国、九州に分布する。常緑の高木で、高さ20m、径1.5mに達する。材は耐朽性、保存性低く、建築材などに用いられる。

コナラ属コナラ節 *Quercus sect. Prinus* ブナ科 図版70-12

横断面：年輪のはじめに大型の道管が、1~数列配列する環孔材である。晩材部では薄壁で角張った小道管が、火炎状に配列する。早材から晩材にかけて道管の径は急激に減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のもの大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属コナラ節に同定される。コナラ属コナラ節にはカシワ、コナラ、ナラガシワ、ミズナラがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉高木で、高さ15m、径60cmぐらいに達する。材は強靱で弾性に富み、建築材などに用いられる。

コナラ属アカガシ亜属 *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* ブナ科 図版70-13

横断面：中型から大型の道管が、1～数列幅で年輪界に関係なく放射方向に配列する放射孔材である。道管は単独で複合しない。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のもの大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属アカガシ亜属に同定される。コナラ属アカガシ亜属にはアカガシ、イチイガシ、アラカシ、シラカシなどがあり、本州、四国、九州に分布する。常緑高木で、高さ30m、径1.5m以上に達する。材は堅硬で強靱、弾力性が強く耐湿性も高い。特に農耕具に用いられる。

ケヤキ *Zelkova serrata* Makino ニレ科 図版70-14

横断面：年輪のはじめに大型の道管が1～2列配列する環孔材である。孔圍部外の小道管は多数複合して円形、接線状ないし斜線状に配列する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、小道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織はほとんどが平伏細胞であるが、上下の縁辺部のもは方形細胞でしばしば大きくふくらみ、なかには結晶を含むものがある。

接線断面：放射組織は異性放射組織型で、上下の縁辺部の細胞のなかには大きくふくらんでいるものがある。幅は1～7細胞幅である。

以上の形質よりケヤキに同定される。ケヤキは本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、通常高さ20～25m、径60～70cmぐらいであるが、大きいものは高さ50m、径3mに達する。材は強靱で従曲性に富み、建築、家具、器具、船、土木などに用いられる。

シキミ *Illicium religiosum* Sieb. et Zucc. モクレン科 図版71-15

横断面：小型で角張った道管が、ほぼ単独で密に分布する散孔材である。早材部の年輪界付近に於いて、道管が少し並ぶ傾向を示す。

放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は多く50を越える。放射組織は平伏細胞、方形細胞、直立細胞からなる。

接線断面：放射組織は、異性放射組織型で、1～3細胞幅で、単列部が太い。

以上の形質よりシキミに同定される。シキミは、関東以西の本州、四国、九州、沖縄に分布する。常緑の小高木で、高さ10m、径30cmに達する。材は、強さ中庸で、旋作、器具、薪などに用いられる。



タブノキ *Machilus thunbergii* Sieb. et Zucc. クスノキ科 図版71-16

横断面：やや小型から中型の道管が、単独および2～数個放射方向に複合して散在する散孔材である。道管の周囲を鞘状に軸方向柔細胞が取り囲んでいる。これらの柔細胞の中には、油を含み大きく膨れ上がったものも存在する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔または少数ではあるが、数の少ない階段穿孔が存在する。放射組織はほとんどが平伏細胞で上下の縁辺部のみ直立細胞からなる。

接線断面：放射組織は異性放射組織型で1～2細胞幅である。上下の縁辺部の直立細胞のなかには、しばしば大きく膨れ上がったものがみられる。

以上の形質よりタブノキに同定される。タブノキは、本州（暖地）、四国、九州、沖縄に分布する。常緑の高木で、高さ15m、径1mに達する。材は耐朽性、保存性ともに中庸で、建築、家具、土木、器具、楽器、船、彫刻、薪炭などに用いられる。

イスノキ *Distylium racemosum* Sieb. et Zucc. マンサク科 図版71-17

横断面：小型でやや角張った道管が、ほぼ単独に散在する散孔材である。軸方向柔細胞が接線方向に向かって黒い線状に並んで見られ、ほぼ一定の間隔で規則的に配列する。

放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は比較的少なく15前後のものが多い。放射組織は異性である。

接線断面：放射組織は、異性放射組織型で、ほとんどが1～2細胞幅であるが、まれに3細胞幅のものも存在する。

以上の形質よりイスノキに同定される。イスノキは関東以西の本州、四国、九州、沖縄に分布する。常緑の高木で、高さ20m、径1mに達する。耐朽性および保存性の高い材で、建築、器具、楽器、ろくろ細工、櫛、薪炭などに用いられる。

サクラ属 *Prunus*バラ科 図版72-18

横断面：小型で丸い道管が、単独あるいは2～3個放射方向および斜め方向に複合して散在する散孔材である。道管の径は、早材部から晩材部にかけてゆるやかに減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織は、同性に近い異性である。

接線断面：放射組織は、異性放射組織型で1～4細胞幅である。

以上の形質よりサクラ属に同定される。サクラ属には、ヤマザクラ、ウワミズザクラ、シウリザクラ、ウメ、モモなどがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木または低木である。

ユズリハ属 *Daphniphyllum* ユズリハ科 図版72-19

横断面：小型で角張った道管が、ほぼ単独に密に散在する散孔材である。

放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は20～50本である。放射組織は平伏細胞、方形細胞、直立細胞からなる。

接線断面：放射組織は、異性放射組織型で、1～2細胞幅である。

以上の形質よりユズリハ属に同定される。ユズリハ属にはユズリハ、ヒメユズリハなどがあり、北海

道、本州、四国、九州、沖縄に分布する。常緑の高木または低木である。

ムクロジ *Sapindus mukorossi* Gaertn. ムクロジ科 図版72-20

横断面：大型でやや厚壁の道管が単独ときに2個複合して年輪のはじめに1～2列疎に配列する環孔材である。晩材部では小型で薄壁の角張った道管が数個おもに放射方向に複合して散在する。軸方向柔細胞は早材部で周囲状、晩材部では数列幅で帯状となって接線方向に配列する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は同性である。小道管の内壁にらせん肥厚が存在する。

接線断面：放射組織は、同性放射組織型で1～3細胞幅である。放射組織の外形はいびつである。

以上の形質よりムクロジに同定される。ムクロジは本州（茨城県、新潟県以南）、四国、九州、沖縄に分布する。落葉の高木で、高さ25m、径1mに達する。材はやや軽軟で脆弱な材で、器具、家具などに用いられる。

アワブキ属 *Meliosma* アワブキ科 図版73-21

横断面：小型の道管が、単独ないしその複合部に1～2個の柔細胞をはさんで、放射方向にむかって2～4個複合して散在する散孔材である。

放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は少なくとも10本前後である。放射組織は異性である。

接線断面：放射組織は、異性放射組織型で1～4細胞幅である。

以上の形質よりアワブキ属に同定される。アワブキ属は本州、四国、九州に分布する。落葉または常緑の小高木から高木である。

サカキ *Cleyera japonica* Thunb. ツバキ科 図版73-22

横断面：小型の道管が、単独ないし2個複合して密に散在する散孔材である。

放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は多く60を越える。放射組織は平伏細胞、方形細胞、直立細胞からなる異性である。

接線断面：放射組織は、異性放射組織型で単列である。

以上の形質よりサカキに同定される。サカキは関東以西の本州、四国、九州、沖縄に分布する。常緑高木で、通常高さ8～10m、径20～30cmである。材は強韌、堅硬で、建築、器具などに用いられる。

ヒサカキ属 *Eurya* ツバキ科 図版73-23

横断面：小型で角張った道管が、ほぼ単独で密に散在する散孔材である。

放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は多く60を越える。放射組織は平伏細胞、方形細胞、直立細胞からなる。

接線断面：放射組織は、異性放射組織型で、1～3細胞幅で、多列部と比べて単列部が長い。

以上の形質よりヒサカキ属に同定される。ヒサカキ属にはヒサカキ、ハマヒサカキなどがあり、本州、四国、九州、沖縄に分布する。常緑の小高木で、通常高さ10m、径30cmである。材は強さ中庸で、器具などに用いられる。

エゴノキ属 *Styrax* エゴノキ科 図版74-24

横断面：年輪のはじめに、やや小型で丸い道管が、おもに2~4個放射方向に複合して散在し、晩材部ではごく小型で角張った道管が単独あるいは数個放射方向に複合して散在する散孔材である。道管の径は、早材部から晩材部にかけてゆるやかに減少する。軸方向柔細胞が、晩材部において接線状に配列する。

放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は10本前後である。放射組織は異性である。

接線断面：放射組織は、異性放射組織型で1~3細胞幅である。

以上の形質よりエゴノキ属に同定される。エゴノキ属には、エゴノキ、ハクウンボクなどがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉の小高木で、高さ10m、径30cmである。材は器具、旋作、炭炭などに用いられる。

ウツギ属 *Deutzia* ユキノシタ科 図版74-25

横断面：小型で多角形の道管が、ほぼ単独で均一に散在する散孔材である。放射組織の細胞が大きく接線方向への幅が道管の直径より大きいことが認められる。

放射断面：道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は50本前後である。

接線断面：放射組織は異性放射組織型で、2~5細胞幅の細長い紡錘形であり鞘細胞のあるものが見られる。

以上の形質よりウツギ属に同定される。ウツギ属は本州、四国、九州に分布する。落葉の低木で、枝には髓があり占くなく中空となる。材は木釘などに用いられる。

## 5. 所見

同定の結果、観音寺遺跡の木材は、ヒノキ47点、コナラ属アカガシ亜属11点、ツブラジイ6点、ウツギ属6点、スギ5点、ツガ属3点、モミ属1点、コウヤマキ2点、ヤナギ属2点、タブノキ2点、ヒサカキ属2点、サクラ属2点、マツ属複雑管束亜属1点、トガサワラ1点、コナラ属コナラ節1点、ケヤキ1点、シキミ1点、イスノキ1点、ユズリハ属1点、ムクロジ1点、アワブキ属1点、サカキ1点、エゴノキ属1点、であった。

ヒノキが極めて多く、煎串、人形、馬形、鳥形、陽物形、曲物底板、挽物(皿)、槽、蒔木、火付棒、把手、腰掛、杓子、匙、箸、檜扇、糸巻積木、糸巻棒木、琴柱、繩棒、馬鞍、山下駄、櫓、柄など用途を問わず幅広く使用されている。木理通直で大きな材が取れる良材であり特に保存性が高い。次に多いコナラ属アカガシ亜属は舟形、人形、火鑽板、自在鍵、木鍾、有頭棒、柄など、こちらも幅広く使用されている。弾力性があり強く硬い材である。ツブラジイは舟形、人形、部材に、ヤナギ属が舟形に使用されている。どちらの材も耐朽性、保存性の低い材である。スギは祭串、紡織具形、曲物底板、把手、中筒に使用されている。加工工作が容易な上、大きな材がとれる良材である。コウヤマキは織形、柱に使用されている。特に耐湿性に優れ、針葉樹の中では最も加工のしやすい材である。他の針葉樹ではモミ属が刀形に使用されている。モミ属は温帯性のモミと考えられる。トガサワラは紡輪に使用されている。モミ、トガサワラはどちらも耐朽性、保存性は高くなく、軽軟で加工容易な材である。ツガ属は祭串、糸巻、編台に使用されている。木理概ね通直で肌目は粗く、耐朽性、保存性は中庸、切削、加工の

難度はやや困難である。マツ属複維管束亜属は杭に使用されている。水湿に良く耐える材である。他の広葉樹では、コナラ属コナラ節は杭に使用されている。強靱で弾力に富んだ材である。ケヤキは杭に使用されている。耐朽性、保存性は高く、水湿にもよく耐える材である。タブノキは下駄、独楽に使用されている。強さ中庸で耐朽性、保存性、切削、加工の難度は中庸の材である。サクラ属は舟形、人形に使用されている。耐久性、保存性の高い材で、切削、加工の難度は中庸の材である。イスノキは櫓に使用されている。耐朽性にすぐれ細かい細工にも良好で器具類にも適する材である。ユズリハ属は組板に使用されている。緻密で均質な材と言える。ムクロジは弓に使用されている。やや軽軟で脆弱な材である。アワビキ属は天秤棒に使用されている。強さ中庸の材である。サカキは舟形に使用されている。概して強靱で堅硬な材である。ヒサカキ属は舟形に使用されている。強さは中庸で材質はサカキに似ているがやや劣る。エゴノキ属は高坏に使用されている。強さ中位でやや堅硬な材である。ウツギ属は人形、剣形、部材に使用されている。概して硬く、耐朽性、保存性の高い材である。

針葉樹のヒノキ、スギ、モミ、トガサワラ、ツガ属、マツ属複維管束亜属、コウヤマキは温帯を中心に分布する。コナラ属アカガシ亜属、ツブラジイ、タブノキ、イスノキは温帯下部の暖温帯の照葉樹林を形成する主要高木である。またサカキ、ヒサカキ属も照葉樹林の構成要素である。他のヤナギ属、コナラ属コナラ節、ケヤキ、シキミ、サクラ属、ユズリハ属、ムクロジ、アワビキ属、エゴノキ属、ウツギ属の広葉樹も温帯ないし温帯下部の暖温帯に分布する広葉樹ばかりである。

以上ほとんどの樹種が遺跡の周辺ないし近隣地域に分布していたと考えられるが、トガサワラは、現在の分布域が紀伊半島と高知県の深山に限られており、流通の可能性も否めない。観音寺遺跡の木材の樹種は、ヒノキが極めて多くコナラ属アカガシ亜属が続くという特徴を有する。

#### 参考文献

- 佐伯 浩・原田 浩 (1985) 針葉樹材の細胞。木材の構造, 文永堂出版, p.20-48.  
佐伯 浩・原田 浩 (1985) 広葉樹材の細胞。木材の構造, 文永堂出版, p.49-100.  
高地 謙・伊東隆夫 (1988) 日本の遺跡出土木製品総覧, 雄山閣, p.296  
山田昌久 (1993) 日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成, 植生史研究特別第1号, 植生史研究会

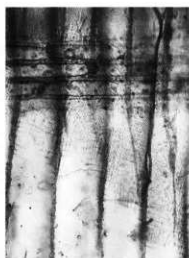
表8 観音寺遺跡における樹種同定結果

No	分類	名称	結果(学名/和名)	掲載番号
1	祭祀具	舟形	<i>Castanopsis cuspidata</i> Schottky	ツブラジイ 575
2	祭祀具	舟形	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属 399
3	祭祀具	舟形	<i>Salix</i>	ヤナギ属 559
4	祭祀具	舟形	<i>Eurya</i>	ヒサカキ属 44
5	祭祀具	舟形	<i>Cleyera japonica</i> Thunb.	サカキ 2234
6	祭祀具	舟形	<i>Castanopsis cuspidata</i> Schottky	ツブラジイ 2359
7	祭祀具	舟形	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属 743
8	祭祀具	舟形	<i>Castanopsis cuspidata</i> Schottky	ツブラジイ 965
9	祭祀具	舟形	<i>Salix</i>	ヤナギ属 1136
10	祭祀具	舟形	<i>Castanopsis cuspidata</i> Schottky	ツブラジイ 1124
11	祭祀具	舟形	<i>Eurya</i>	ヒサカキ属 1131
12	祭祀具	舟形	<i>Prunus</i>	サクラ属 1692
13	祭祀具	舟形	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属 1708
14	祭祀具	舟形	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属 1712
15	祭祀具	斎串	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don	スギ 281
16	祭祀具	斎串	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.	ヒノキ 566
17	祭祀具	斎串	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.	ヒノキ 2297
18	祭祀具	斎串	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.	ヒノキ 707
19	祭祀具	斎串	<i>Tsuga</i>	ツガ属 623
20	祭祀具	斎串	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.	ヒノキ 1173
21	祭祀具	斎串	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.	ヒノキ 1172
22	祭祀具	斎串	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.	ヒノキ 1451
23	祭祀具	斎串	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.	ヒノキ 1564
24	祭祀具	斎串	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.	ヒノキ 147
25	祭祀具	人形	<i>Deutzia</i>	ウツギ属 367
26	祭祀具	人形	<i>Deutzia</i>	ウツギ属 249
27	祭祀具	人形	<i>Deutzia</i>	ウツギ属 347
28	祭祀具	人形	<i>Prunus</i>	サクラ属 557
29	祭祀具	人形	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.	ヒノキ 2028
30	祭祀具	人形	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属 1882
31	祭祀具	人形	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.	ヒノキ 784
32	祭祀具	人形	<i>Castanopsis cuspidata</i> Schottky	ツブラジイ 1673
33	祭祀具	人形	<i>Deutzia</i>	ウツギ属 167
34	祭祀具	馬形	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.	ヒノキ 1682
35	祭祀具	鳥形か	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.	ヒノキ 558
36	祭祀具	刀形	<i>Abies</i>	モミ属 1381
37	祭祀具	紡織具形	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don	スギ 1657
38	祭祀具	籠物形	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.	ヒノキ 1414
39	祭祀具	楯状祭祀具	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.	ヒノキ 1718
40	祭祀具	戈形	<i>Deutzia</i>	ウツギ属 2016
41	祭祀具	剣形か	<i>Sciadopitys verticillata</i> Sieb. et Zucc.	コウヤマキ 1394
42	容器	曲物底板	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.	ヒノキ 592
43	容器	曲物底板	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.	ヒノキ 35
44	容器	曲物底板	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.	ヒノキ 766
45	容器	曲物底板	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don	スギ 880
46	容器	曲物底板	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.	ヒノキ 1102
47	容器	曲物底板	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.	ヒノキ 553
48	容器	曲物底板	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.	ヒノキ 1993
49	容器	高杯か	<i>Syrax</i>	エゴノキ属 1909
50	容器	挽物(皿)	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.	ヒノキ 1347

No	分類	名称	結果 (学名/和名)	掲載番号
51	容器	槽	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.	326
52	雑具	簍木	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.	2307
53	雑具	火付杵	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.	2122
54	雑具	火鑽板	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属
55	雑具	自在	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属
56	雑具	叩板	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.	195
57	雑具	把手	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don	スギ
58	雑具	把手	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.	1460
59	雑具	腰掛	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.	818
60	食器具	杓子	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.	1999
61	食器具	杓子	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.	1355
62	食器具	匙	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.	1367
63	食器具	箸	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.	1364
64	食器具	組板	<i>Daphniphyllum</i>	スズリハ属
65	武器	丸木弓	<i>Sapindus mukorossi</i> Gaertn.	ムクロジ
66	服飾具	檜扇	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.	2177
67	服飾具	檜扇	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.	1285
68	服飾具	扇	<i>Distylium racemosum</i> Sieb. et Zucc.	イスノキ
69	服飾具	下駄	<i>Machilus thunbergii</i> Sieb. et Zucc.	タブノキ
70	紡織具	糸巻機小	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.	236
71	紡織具	糸巻機木	<i>Tsuga</i>	ツガ属
72	紡織具	糸巻機木	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.	1264
73	紡織具	紡輪	<i>Pseudotsuga japonica</i> Beissn.	トガサワラ
74	紡織具	小筒	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don	スギ
75	運搬具	天秤棒	<i>Meliosma</i>	アヲブキ属
76	遊戯具	独楽	<i>Machilus thunbergii</i> Sieb. et Zucc.	タブノキ
77	遊戯具	琴柱	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.	2209
78	農具	槌棒	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.	1591
79	農具	福台	<i>Tsuga</i>	ツガ属
80	農具	馬鍬	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.	1250
81	農具	馬鍬	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.	1204
82	農具	鋤	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.	141
83	農具	木鍬	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属
84	農具	木鍬	<i>Illicium religiosum</i> Sieb. et Zucc.	シキミ
85	農具	田下駄	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.	66
86	漁具	櫻か	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.	583
87	工具	有頭棒	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属
88	工具	柄	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属
89	工具	鑿柄	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属
90	工具	不明	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.	752
91	杭	杭	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	マツ属複雑葉束亜属
92	杭	杭	<i>Zelkova serrata</i> Makino	ケヤキ
93	杭	杭	<i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i>	コナラ属コナラ節
94	部材	部材	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.	1933
95	部材	支脚	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.	1060
96	部材	部材	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.	1473
97	部材	台座	<i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.	1466
98	部材	部材	<i>Deutzia</i>	ウツギ属
99	建築部材	部材	<i>Casianopsis cuspidata</i> Schottky	ツブラジイ
100	建築部材	柱	<i>Sciadopitys verticillata</i> Sieb. et Zucc.	コウヤマキ



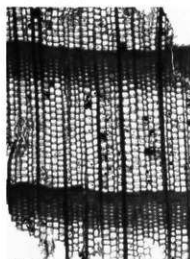
横断面 ————— : 0.2mm  
1 (73 紡輪 トガサワラ)



放射断面 ————— : 0.1mm



接線断面 ————— : 0.1mm



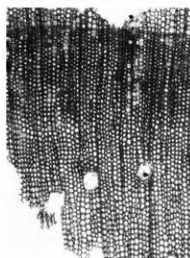
横断面 ————— : 0.5mm  
2 (19 斎串 ツガ属)



放射断面 ————— : 0.05mm



接線断面 ————— : 0.2mm



横断面 ————— : 0.5mm  
3 (91 杭 マツ属複雑管束亜属)

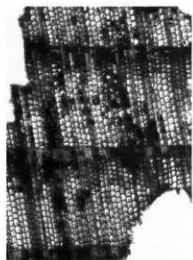


放射断面 ————— : 0.05mm



接線断面 ————— : 0.2mm

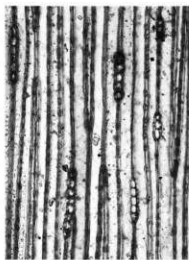
図版67 観音寺遺跡の木材 I



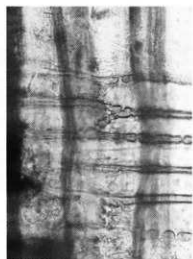
横断面 : 0.5mm  
4 (41 剣形 コウヤマキ)



放射断面 : 0.05mm



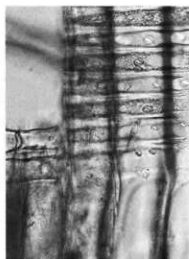
接線断面 : 0.2mm



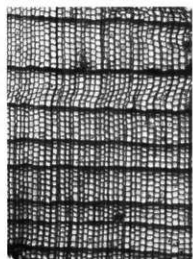
放射断面 : 0.1mm  
5 (36 刀形 モミ属)



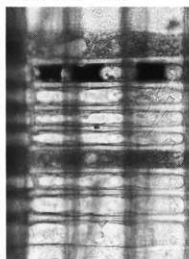
放射断面 : 0.05mm  
6 (57 把手 スギ)



放射断面 : 0.05mm  
7 (59 腰掛 ヒノキ)



横断面 : 0.5mm  
8 (31 人形 ヒノキ)



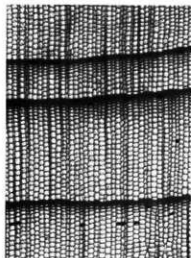
放射断面 : 0.05mm



接線断面 : 0.2mm

図版68 観音寺遺跡の木材 II





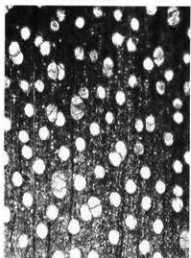
横断面 ————— : 0.5mm  
9 (42 曲物底板 ヒノキ)



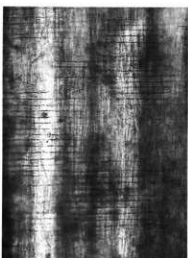
放射断面 ————— : 0.05mm



接線断面 ————— : 0.2mm



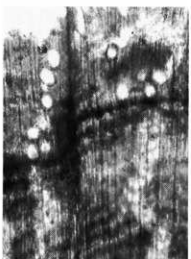
横断面 ————— : 0.4mm  
10 (9 舟形 ヤナギ属)



放射断面 ————— : 0.2mm



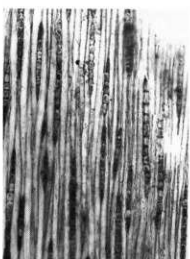
接線断面 ————— : 0.2mm



横断面 ————— : 0.5mm  
11 (10 舟形 ツブラジイ)

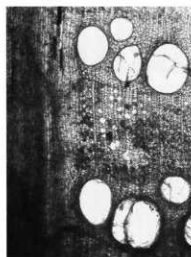


放射断面 ————— : 0.2mm

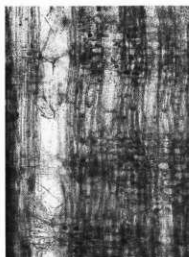


接線断面 ————— : 0.2mm

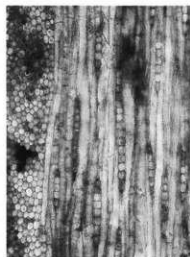
図版69 観音寺遺跡の木材 Ⅲ



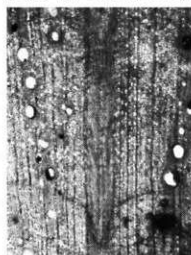
横断面 ————— : 0.4mm  
12 (93 杭 コナラ属コナラ節)



放射断面 ————— : 0.2mm



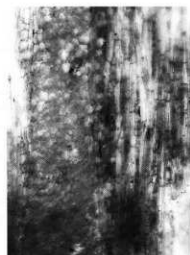
接線断面 ————— : 0.2mm



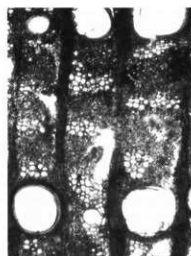
横断面 ————— : 0.5mm  
13 (13 舟形 コナラ属アカガシ亜属)



放射断面 ————— : 0.2mm



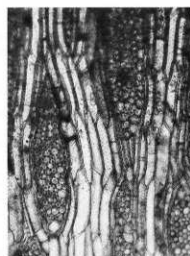
接線断面 ————— : 0.2mm



横断面 ————— : 0.4mm  
14 (92 杭 ケヤキ)

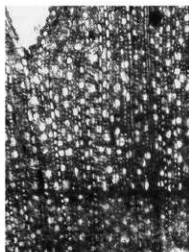


放射断面 ————— : 0.2mm



接線断面 ————— : 0.2mm

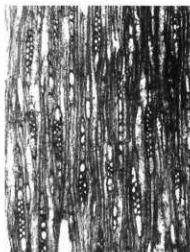
図版70 観音寺遺跡の木材 IV



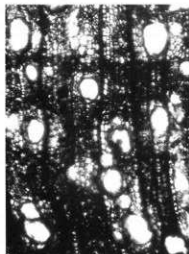
横断面 ————— : 0.4mm  
15 (84 木鍾 シキミ)



放射断面 ————— : 0.1mm



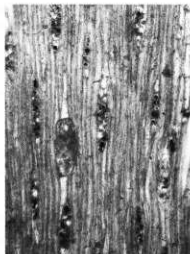
接線断面 ————— : 0.4mm



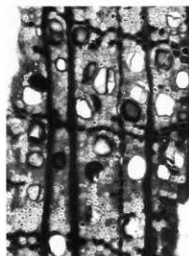
横断面 ————— : 0.4mm  
16 (69 下駄 タブノキ)



放射断面 ————— : 0.2mm



接線断面 ————— : 0.2mm



横断面 ————— : 0.2mm  
17 (68 櫓 イスノキ)



放射断面 ————— : 0.2mm

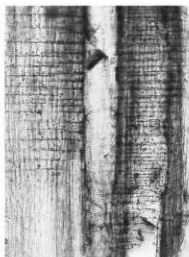


接線断面 ————— : 0.2mm

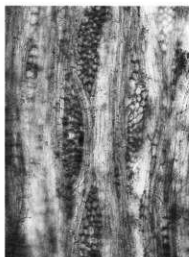
図版71 観音寺遺跡の木材 V



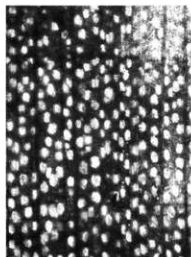
横断面 ————— : 0.4mm  
18 (28 人形 サクラ属)



放射断面 ————— : 0.2mm



接線断面 ————— : 0.2mm



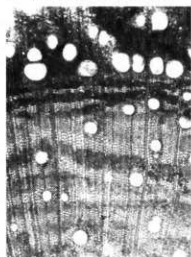
横断面 ————— : 0.4mm  
19 (64 俎板 ユズリハ属)



放射断面 ————— : 0.1mm



接線断面 ————— : 0.2mm



横断面 ————— : 0.5mm  
20 (65 丸木弓 ムクロジ)

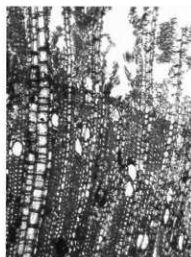


放射断面 ————— : 0.2mm



接線断面 ————— : 0.2mm

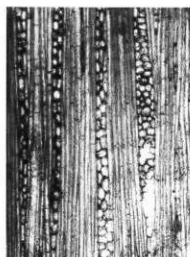
図版72 観音寺遺跡の木材 VI



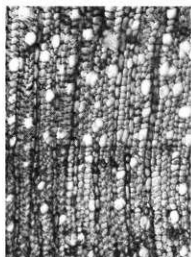
横断面 ————— : 0.4mm  
21 (75 天秤偉 アワブキ属)



放射断面 ————— : 0.1mm



接線断面 ————— : 0.4mm



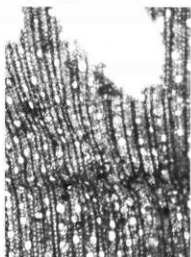
横断面 ————— : 0.4mm  
22 (5 舟形 サカキ)



放射断面 ————— : 0.1mm



接線断面 ————— : 0.1mm



横断面 ————— : 0.4mm  
23 (4 舟形 ヒサカキ属)

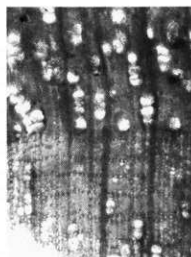


放射断面 ————— : 0.1mm



接線断面 ————— : 0.4mm

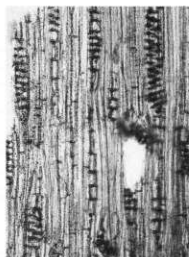
図版73 観音寺遺跡の木材 VII



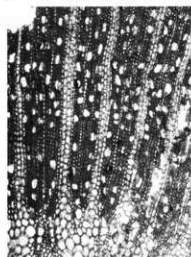
横断面 ————— : 0.4mm  
24 (49 高杯 エゴノキ属)



放射断面 ————— : 0.2mm



接線断面 ————— : 0.2mm



横断面 ————— : 0.4mm  
25 (25 人形 ウツギ属)



放射断面 ————— : 0.1mm



接線断面 ————— : 0.2mm

図版74 観音寺遺跡の木材 VII

# 観音寺遺跡出土の動物遺体

国立歴史民俗博物館

西本豊弘

## はじめに

観音寺遺跡の1998年から2007年度の発掘調査で、ウマとウシの骨を中心に動物遺体が約2800点と大量に出土した。それらは紀元後8世紀から10世紀のもので、当時の川の中に捨てられたものであった。そのため、木材とともに骨も保存されていたが、発掘後に丁寧に乾燥されたにもかかわらず、骨質そのものの保存状態はよくなく、資料の同定後に破損するものが多かった。

なお、鳥取大学医学部解剖学教室・江田真毅氏にはヤマドリデータのデータをいただいた。そして歴博・西本研究室の浪形早季子氏と金憲爽氏には資料整理と表作成にお世話になった。皆様に厚く感謝致します。

## 1. 貝類

貝殻の表皮が14点採集されている。貝皮のみが残っているものが多いので、種名は分からない。

## 2. 魚類

魚類の骨は5点出土した。それらは表に示したようにブリ・クロダイ・マグロ類であった。クロダイとブリは下顎の骨である歯骨が各1点であり、マグロは、小型のマグロ類の主鰓蓋骨・第1椎骨と大型のマグロの椎骨である。マグロ類の種は分からない。

## 3. 爬虫類

スッポンのみが116点出土した。背甲や腹甲などの甲羅の破片が主体であるが、大きな頭蓋骨と四肢骨も見られた。背甲や腹甲がいくつかまとまって出土する場合もあり、自然死したのか食料として利用されたものか分からない。

## 4. 鳥類

鳥骨の出土量は42点と少ないが、ガンカモ類・キジ類・ニワトリ・ツル類・ウ類・サギ類・ヘラサギ類・カラス類・クイナ類など種類は多い。古代の遺跡であることから、ニワトリが含まれるのかどうか、またどのようなニワトリであるのか問題であった。

そこで、まずニワトリについてみると、少なくとも尺骨・大腿骨・脛骨・中足骨・鳥口骨など5点はニワトリと思われる。しかも、現代の各地の地鶏程度の大きさであり、予想外に大きい種であった。ニワトリ類は大小の差が大きく、またキジ・ヤマドリと類似した形態であることから野生のキジ類との区別が困難である。資料の観察の結果、この遺跡ではキジとニワトリが含まれること、ヤマドリも含まれる可能性が高いことが明らかとなった。この点については、鳥取大学医学部の江田真毅氏から提供していただいたヤマドリ骨格の写真も参考とした。

今回、この遺跡で出土したニワトリ類は、高知産の小国種よりも少し大きく、江戸時代以前の各地の在来種のニワトリ類に近い普通のニワトリとしてよいであろう。ただし、出土量が少ないことは、奈良時代に多く公布された教生禁断令や肉食禁止令の影響かもしれない。

野生の鳥類については、ヒシクイ程度の大きなガン類とマガモ程度のカモやアオサギなどの大型のサギ類、カワウヤカラス・ツルの幼鳥等が、ごく少量含まれていた。また、種不明の小型のカラスも見られた。ヘラサギ科やクイナ科の鳥類も含まれていた。すべて水田や川辺など低湿地に普通に見られる種類である。出土量が少ないことから、キジやカモ類を含めて積極的な鳥類利用は行われていなかったのではなかろうか。

## 5. 哺乳類

哺乳類はこの遺跡の動物遺体の主体であり約2000点出土した。その内1619点の部位と種を同定した。ウマが377点で24%でありもっとも多い。ウシも256点であり、ウマまたはウシとした肋骨や椎骨を合わせるとウマとウシで976点であり両者で60%を占める。その他の獣類では野生のシカが多い。イノシシは少なく、家畜のブタはほとんど見られなかった。イヌは131点と比較的多く、大小の差異が見られた。イエネコが1個体分出土したことは興味深い。弥生時代にはすでにイエネコが飼育されているが、古代のイエネコの骨格は今のところ、この例だけである。

### a. ウマ

ウマの内容についてみると、表に示したように主要な部位の出土量は377点である。下顎骨の出土量から見ると少なくとも14個体以上は含まれる。おそらく実際にはその倍の30個体分以上であろう。頭蓋骨や下顎骨、四肢骨のすべての部位で成獣が多く若獣や幼獣は少ない。それらの幼若獣が本来捨てられた量が少なかったとしても、それらの年齢の個体が少ないのは骨質がもろくて保存されにくかったことも影響しているのであろう。成獣個体の四肢骨から大きさを推定してみると表とグラフに示したようになった。体高復元のできる部位を可能な限り利用したので、同一個体のものを重複して表している可能性が高く、表とグラフに示した数量は個体数を示すものではない。この点を考慮したとしても、この遺跡のウマは体高100cmから140cm程度である。この遺跡のウマは比較的大きいということができる。それを時期別に示すと、9世紀のウマが多い。そして、8世紀から10世紀にかけての時間的変化を見ると新しくなるに従って徐々に小さくなっている傾向がうかがえる。筆者は以前に中世以降に大きくなると述べたことがある。しかし、それ以降の出土例から見ると古墳時代のウマは比較的大きく、古代・中世には小さな個体も大きな個体も出土している。関東地方の古代の農村では小さいウマを老齢まで労役に使っている例があるが、この遺跡のように地方の役所と考えられる遺跡や鎌倉などの都市では大きな個体も飼育されていたことが明らかとなった。むしろ、この遺跡の出土例から見ると8世紀から10世紀にかけて小さくなる傾向が見られる。この例から見ると、ウマの大小は単なる時期差だけではなく、地方の中心的性格をもつか、農村的性格を持つかなどの遺跡の性格を反映している可能性がある。なお、ウマの雌雄は犬歯の有無で判断しているが、この遺跡では雌雄ともに見られ、どちらが多いかは分らない。

### b. ウシ

ウシの骨も256点と多く出土した。右側下顎骨の出土量からみて少なくとも11個体以上で、実際には20個体分以上の骨格であろう。ウシの骨は西日本の古代以降の遺跡ではウマと同量程度出土している。しかし、この遺跡のように最小個体が11個体と多く出土した遺跡はない。ウシの大きさを推定してみると102cmから135cmの範囲であり、かなり大きいことが分かる。体高を推定できた資料から見ると時間的には8世紀後半のものが多く、この時期には推定体高135cmのものも含まれる。そしてウマと同



様に、10世紀になると若干小さくなる傾向がある。現在のウシの在来品種では雄が体高120cmから140cm程度であることから、この遺跡のウシは雌雄が含まれていると思われる。なお、ウシの場合は角の有無で雌雄は分けられないので、骨格からの雌雄の判別はできない。

ところで、ウシとウマの骨格を見ていると、四肢骨も多く出土しており、特に少ない部位はない。中世や近世では橈骨や手骨・中足骨が骨製品の原材料に使われるので、出土量が少ない場合がある。ここでは、そのような部位の偏りがないことから、骨製品の製作はあまり行われていなかったのかも知れない。なお、ウマとウシの頭蓋骨を見ると、後頭部の上面が意図的に壊されているものが大部分であることから、おそらくウマとウシの脳髓が採取されて脳なめしに使われていたのであろう。その点から見ると「皮なめし」などの加工を行う技術者が存在したと推測される。

#### c. イヌ

家畜のイヌは132点出土し、最小個体数は5個体である。頭蓋骨の形態を見ると、額段が少し見られるタイプで、下顎骨の底部はすこし丸みをもっており、基本的に弥生犬の形質と変わらない。推定体高37cmから48cmまで見られ、大小の差異があったようである。四肢骨も細く華奢なものど大きくがっしりしたタイプが見られた。四肢骨が折れているイヌも見られることから、大型のイヌは狩猟用に飼育されていたのであろう。

#### d. ネコ

イエネコの骨は、上腕骨以外は一括して採取されたもので、出土地点も近いことから、おそらくすべて同一個体であろう。現在の在来品種のイエネコとほぼ同じ大きさのネコであった。イエネコは文献によると古代の宮中や貴族によって飼われており、中世になると庶民でも飼育されるようになる。イエネコの骨が多く出土するのは江戸時代が大部分である。最近、弥生時代の老蛟のカラカミ貝塚で出土したといわれているので、弥生時代以降、イエネコが飼育されていたのであろう。古代の骨格資料としてはこの例しか知られていない。

#### e. イノシシ・ブタ

イノシシ類は51点出土している。シカに比べてかなり少ない。日本の古代では職業集団である猪養(飼)部によりブタが飼育されていた。そこで、この遺跡のイノシシ類の骨の中にブタの特徴を示すものがないかどうか慎重に調べてみた。その結果、ブタの可能性のあるものは3点しか認められなかった。それらは下顎骨1点と橈骨2点である。下顎骨の場合は下顎連合部の上方向への傾きが大きいことからブタの可能性がある。また、橈骨の場合は、骨端の肥大化が認められたが、若い個体であるため、ブタとは言い切れない。その他の四肢骨の大部分は野生のイノシシと思われるものであった。これらのことから、この遺跡ではブタ飼育はほとんど行われていなかったのであろう。古代における家畜に対する殺生禁断令と肉食禁止令がこの地域ではよく遵守されていたと思われる。

#### f. シカ

野生のシカの骨は、部位を同定したものだけでも314点出土しており、シカ狩猟が盛んに行なわれていたと推測される。イノシシに比べてもかなり多いので、シカの生息に適した環境であったのかもしれない。シカの体格は小さく、この点からもシカの生息個体数が多かったと推測される。

#### g. その他

その他の野生獣ではアナグマが5点とキツネ?1点、タヌキ1点が認められただけである。キツネとしたものは小さな下顎骨の破片であり、小型のイヌの可能性もあるのでキツネ?とした。なお、ヒトの

骨も6点採集されていた。

#### まとめ

この遺跡の動物遺体の特徴は、家畜のウマとウシが主体であったことである。そして、ウマとウシのいずれも大きな個体が見られたことである。さらに、家畜・家禽のイヌ・ネコ・ニワトリや多種の野鳥類、野生のシカ・イノシシなどが出土したことである。ウシとウマが多いことは、この遺跡が当時の阿波の国府とされることと関連しているであろう。鳥類の種類の高さは吉野川流域という立地条件によるものである。

この遺跡の動物遺体はウマとウシが多いことが特徴である。ウマは小型から大型まであり、大きな個体が多いことが注目される。この遺跡が阿波の国府跡と推定されていることから、国府として大きな軍馬を飼育していた可能性が考えられる。

これまで、日本の古代の動物遺体の出土量は少なく、当時の人々が動物とどのように接してきたのかは文献資料に依存するしかなかった。その点で、この遺跡の動物遺体は、当時の動物と人間生活との関連を考える上で大変貴重な資料と言える。

表9 種名表

魚類	
ブリ	<i>Seriola quinqueradiata</i>
クロダイ	<i>Acanthopagrus schlegelii</i>
マダロ類	<i>Thunnus sp.indet.</i>
爬虫類	
スッポン	<i>Trionyx sinensis japonicus</i>
鳥類	
カラス類	<i>Corvus sp. indet.</i>
ヘラサギ科	Plataleidae gen. indet.
アオサギ	<i>Ardea cinerea jayii</i>
サギ科の一種	Ardeidae gen. indet.
ヒシクイ	<i>Anser fabalis serinostri</i>
カモ類	Anatidae gen. indet.
カワウ	<i>Phalacrocorax carbo hanelae</i>
ツル科	Gruidae gen. indet.
クイナ科	Rallidae gen. indet.
キジ	<i>Phasianus colchicus tobikaii</i>
ヤマドリ	<i>Phasianus soemmerringii scintillans</i>
ニワトリ	<i>Gallus gallus domesticus</i>
哺乳類	
ホンドタヌキ	<i>Nyctereutes procyonoides viverrinus</i>
ホンドキツネ	<i>Vulpes vulpes japonica</i>
ニホンアナグマ	<i>Meles meles ussuricus</i>
ニホンイノシシ	<i>Sus scrofa leucomystrax</i>
ニホンジカ	<i>Cervus nippon</i>
イヌ	<i>Canis familiaris</i>
ネコ	<i>Felis catus</i>
ウマ	<i>Equus caballus</i>
ウシ	<i>Bos taurus</i>
ヒト	<i>Homo sapiens</i>

表11 魚類出土一覧表

種名	約長名	左右	備考	個数
ブリ	鱗骨	R		1
クロダイ	鱗骨	L	大型 推定体長30cm以上	1
マダロ	椎骨		大型	1
マダロ類小	主軸椎骨	R	標本(ビンナガマダロ)より少し大きい程度	1
マダロ類小	第1椎骨		標本(ビンナガマダロ)より小型	1

表13 哺乳類出土点数

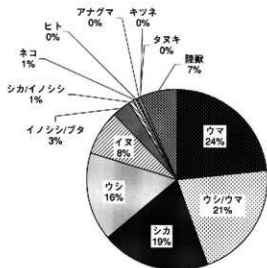
種名	個数
ウマ	377
ウシ/ウマ	343
シカ	314
ウシ	256
イヌ	132
イノシシ/ブタ	51
シカ/イノシシ	16
ネコ	9
ヒト	6
アナグマ	5
キツネ	1
タヌキ	1
熊獣	108
合計	1619

表10 総破片数

貝類	魚類	爬虫類	鳥類	哺乳類	同定不能
14	5	116	42	1620	591
総破片数 2388					

表12 爬虫類出土一覧表

種名	部位名	左右	個数
スッポン	頸蓋骨		2
	鳥口骨	L	1
		R	1
		LR不	1
	前鳥口骨・肩甲骨		2
	肩甲骨	L	1
	上腕骨	L	1
		R	2
		LR不	1
	上腕骨/大腕骨	LR不	1
	新骨	L	1
寛骨片		1	
肋骨板		64	
上腕甲骨		2	
内腕甲骨		6	
中腕甲骨		4	
下腕甲骨		5	
短腕甲骨		1	
蹠骨		10	
胫骨/蹠骨		9	
合計			116



第492図 哺乳類出土点数内訳

表14 出土鳥類一覧表

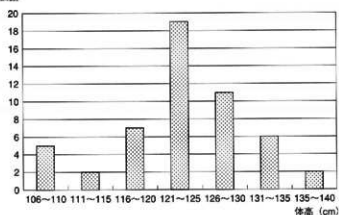
種名	部位名	保存状態	年齢	性別	発見	種別	測定値の算出値 (mm)					
							全長 (GL)	趾位距離 (Sp)	骨節距離 (SD)	趾位幅 (BD)		
小型のカラス	腿骨	L 文存			小型	1						
小型のカラス	鳥口骨	R 文存			小型	1	44.9					
小型のカラス	尺骨	L はば完存(趾位幅ほんの少し欠く)			小型	1						
小型のカラス	尺骨	R はば完存(趾位幅ほんの少し欠く)			小型 ハシブトカラス類(36.6g)より小	1						
小型のカラス	中趾骨	L はば完存(趾位幅少し欠く)				1	56.8					
カラス?	上顎骨	R はば完存				1	74.4		7.0	16.4		
ハツキザサ	中手骨	L はば完存			コウノトリ(110.0g)より小	1	73.0+α (75.0±)					
アオキギ	大腿骨	R 完存			標準と同大、少し長い	1	90.4	14.2± (14.7±)	6.8	14.8		
アオキギ	尺骨	L 文存(ただし腫れている)			アオキギより大きい(アオキギの標準は1:205.0)	1	205.0					
アオキギ?	跗骨	R 完存			現生アオキギ 同; 205.0g より 短り大	1	215.0±					
アオキギ?	中趾骨	R 完存			標準: 01:152.7, Sp: 14.2, Bd: 14.6, SD: 3.3 より少し大きく長い	1	164.4	13.9	3.7	15.0		
アオキギ?	腿骨		分離断片			1						
キギ?	跗骨		文存			1						
キギ?	大趾骨	L 完存				1						
キギ?	跗骨・場合併存		文存			1						
キギ?	大趾骨	R 完存				1						
キギ類	跗骨	L はば完存(趾位幅少し欠く)			アオキギ標準より少し長いが脚・ アオキギの大趾?	1	210.0+α					
キギ類	中趾骨	R			アオキギと同大	1						
ヒシタキ	尺骨	R 骨幹部一節欠損			現存部分: 125.8mm	1						
ヒシタキ	尺骨	L はば完存(趾位幅少し欠く)				1	157.6+α (159±)					
キモ	上顎骨	R 完存			細いタイプ	1	76.0	16.3		11.5		
キワウ	上顎骨	R 文存			現生キワウと同大 Sp 短め下	1	159.1			16.8		
キワウ	腿骨	L 骨幹部一節欠損				1						
ツル	尺骨	L 近位端一骨幹部			マナヅル? (マナヅルと同大)	1						
ツル	跗骨	L 趾位幅 骨幹部			同一種体か?	1						
ニワトリ	中趾骨	L 骨幹部				1						
ニワトリ	尺骨	R 完存			標準距離より大、キジより大	1						
ニワトリ?	大趾骨	R 併存			細くて重厚 趾位部の形からキワウかニワトリのいずれか? 上縁からニワトリ?とする	1	82.0	13.8- (測定不定)	6.4	15.2		
ニワトリ?	大趾骨	R はば完存(骨欠く)			細くて重厚 と書くはみなし、上縁よりニワトリ?とした	1	77.7±		7.1	15.8		
ニワトリ?	跗骨	L 併存			標準距離とキジより大	1	119.2	21.4		10.6		
ニワトリ or キマドリ	大趾骨	R 骨幹部一節欠損			キジとはほぼ同大 ニワトリかキマドリ?は距離不明	1	80.9+α		6.9			
ニワトリ or キマドリ	大趾骨	R 近位端一骨幹部			細くて重厚 骨長約71.7mm おそらくニワトリの小型	1			5.6			
ニワトリ or キマドリ	大趾骨	L はば完存(趾位幅一節欠く)			細くて肉厚強い	1		13.9				
キジ or キマドリ?	跗骨	L 完存			小趾と同大だが脚・ 趾位キジとほぼ同大だが少し短い 肩キジとは趾位部の上縁が異なる	1	107.4	最大幅15.2 の全長12.1	6.2	16.1		
ニワトリ類	鳥口骨	R 完存				1						
クイナ?	中趾骨	L 骨幹部			現生70より少し大形 現存長さ: 6mm	1			6.0			
クイナ?	中趾骨	R はば完(ただし趾位幅少し欠く)			現生なし 現生キジより少し小 強度に弱いことからニワトリ?	1	67.3+α (66.0±)	0.9	5.2	16.8		
種不明鳥類	中趾骨	R 完存			標準距離より小形	1	67.1					
種不明鳥類	跗骨				中趾の高脚(アオキギ類)	1						
種不明鳥類	跗骨片				小型	1						
種不明鳥類	跗骨?					1						



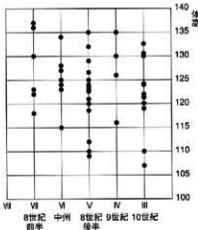
表16 ウマの体高値一覧

馬名	出生地	調教	調教師	血統	性別	年代	種別	左右	既得取組	転戦	所属	回数	取組書の計測値 (cm)				測定時期 (年)
													立尺 (GL)	立尺幅 (Hq)	骨節幅 (NS)	骨節幅 (NS)	
1	SR001	04	D-4	V	非純血系	大雑作	馬	非骨節一途取組	成駒	大出	1	1				124	
2	SR001	05	A-9	V	純血系	大雑作	馬	骨節部一途取組	成駒	櫻木より小さい	1					119	
3	SR001	05	A-10	V	純血系	大雑作	馬	骨節部一途取組	成駒	櫻木より小さい	1	300.0				123	
4	SR001	05	A-10	V	純血系	大雑作	馬	骨節部一途取組	成駒	櫻木より少し小	1		60.6	60.6		123	
5	SR001	05	B-10	V	純血系	大雑作	馬	骨節部一途取組	成駒	小さい	1			70.6		123	
6	SR001	05	C-1	V	純血系	大雑作	馬	骨節部一途取組	成駒	櫻木より一回り小さい	1	270+				126	
7	SR001	05	A-11	V	純血系	大雑作	馬	骨節部一途取組	成駒	小さい	1	190.0				131	
8	SR001	05	D-10	V	純血系	大雑作	馬	骨節部一途取組	成駒	小駒	1				71.0	129	
9	SR001	05	D-15	V	純血系	大雑作	馬	骨節部一途取組	成駒	成駒	1				81.7	70.6	137
10	SR001	05	B-8	V	純血系	大雑作	馬	骨節部一途取組	成駒	小駒	1				68.4	130	
11	SR001	05	D-10	V	純血系	大雑作	馬	骨節部一途取組	成駒	成駒より少し小	1	220.2				130	
13	SR001	05	B-8	V	純血系	大雑作	馬	骨節部一途取組	成駒	成駒より少し小	1	203.9				124	
14	SR001	05	D-16	V	純血系	大雑作	馬	骨節部一途取組	成駒	成駒より少し小	1	202.0				124	
14	SR001	05	D-10	V	純血系	大雑作	馬	骨節部一途取組	成駒	成駒より少し小	1	203.0				121	
15	SR001	05	A-11	V	純血系	大雑作	馬	骨節部一途取組	成駒	成駒より少し小	1	204.0	50.2		66.8	124	
16	SR001	06	T-12	V	純血系	大雑作	馬	骨節部一途取組	成駒	成駒より少し小	1	223.3+				120	
17	SR001	06	T-17	V	純血系	大雑作	馬	骨節部一途取組	成駒	成駒より少し小	1	223.3+				122	
18	SR001	05	C-12	V	純血系	大雑作	馬	骨節部一途取組	成駒	成駒より少し小	1	241.6				122	
19	SR001	07	A-12	V	純血系	大雑作	馬	骨節部一途取組	成駒	成駒より少し小	1	263.0±				122	
20	SR001	07	A-9	V	純血系	大雑作	馬	骨節部一途取組	成駒	成駒より少し小	1	250.0				127	
21	SR001	04	E-20	V	純血系	大雑作	馬	骨節部一途取組	成駒	成駒より少し小	1	255.4	47.3			127	
22	SR001	08	T-15	V	純血系	大雑作	馬	骨節部一途取組	成駒	成駒より少し小	1	253.0±	47.7			126	
23	SR001	1	M-18	V	純血系	大雑作	馬	骨節部一途取組	成駒	成駒より少し小	1	250.0±				124	
24	SR001	05	A-11	V	純血系	大雑作	馬	骨節部一途取組	成駒	成駒より少し小	1	253.1	42.6	25.7	44.6	124	
25	SR001	05	D-10	V	純血系	大雑作	馬	骨節部一途取組	成駒	成駒より少し小	1	250.0±				124	
26	SR001	04	F-2	V	純血系	大雑作	馬	骨節部一途取組	成駒	成駒より少し小	1	255.0	45.5		45.3	127	
27	SR001	05	D-10	V	純血系	大雑作	馬	骨節部一途取組	成駒	成駒より少し小	1	263.4				123	
28	SR001	00	B-9	V	純血系	大雑作	馬	骨節部一途取組	成駒	成駒より少し小	1	65.0+				112	
29	SR001	06	A-9	V	純血系	大雑作	馬	骨節部一途取組	成駒	成駒より少し小	1	260+				109	
30	SR001	05	A-11	V	純血系	大雑作	馬	骨節部一途取組	成駒	成駒より少し小	1	300.0				120	
30	SR001	05	A-11	V	純血系	大雑作	馬	骨節部一途取組	成駒	成駒より少し小	1	315.0				123	
31	SR001	05	D-10	V	純血系	大雑作	馬	骨節部一途取組	成駒	成駒より少し小	1	315.0				123	
32	SR001	04	C-2	V	純血系	大雑作	馬	骨節部一途取組	成駒	成駒より少し小	1	320.0+				125	
33	SR001	05	C-11	V	純血系	大雑作	馬	骨節部一途取組	成駒	成駒より少し小	1	296.0	72.0	21.0		118	
34	SR001	07	A-11	V	純血系	大雑作	馬	骨節部一途取組	成駒	成駒より少し小	1	320.0	73.5	33.9		120	
35	SR001	05	C-16	V	純血系	大雑作	馬	骨節部一途取組	成駒	成駒より少し小	1	320.0				130	
36	SR001	05	D-10	V	純血系	大雑作	馬	骨節部一途取組	成駒	成駒より少し小	1	314.0+				127	
37	SR001	05	D-10	V	純血系	大雑作	馬	骨節部一途取組	成駒	成駒より少し小	1	300.0				120	
38	SR001	06	T-20	V	純血系	大雑作	馬	骨節部一途取組	成駒	成駒より少し小	1	306.0	85.0			119	
39	SR001	06	D-1	V	純血系	大雑作	馬	骨節部一途取組	成駒	成駒より少し小	1	327.0				118	
40	SR001	05	D-10	V	純血系	大雑作	馬	骨節部一途取組	成駒	成駒より少し小	1	310.0				119	
41	SR001	05	D-10	V	純血系	大雑作	馬	骨節部一途取組	成駒	成駒より少し小	1	310.0				119	
42	SR001	05	A-19	V	純血系	大雑作	馬	骨節部一途取組	成駒	成駒より少し小	1	290.0				132	
43	SR001	05	C-11	V	純血系	大雑作	馬	骨節部一途取組	成駒	成駒より少し小	1	290.0				130	
44	SR001	05	C-10	V	純血系	大雑作	馬	骨節部一途取組	成駒	成駒より少し小	1	227.0				128	
45	SR001	05	D-2	V	純血系	大雑作	馬	骨節部一途取組	成駒	成駒より少し小	1	315.0	81.1			121	
46	SR001	05	A-10	V	純血系	大雑作	馬	骨節部一途取組	成駒	成駒より少し小	1					120	
47	SR001	04	F-2	V	純血系	大雑作	馬	骨節部一途取組	成駒	成駒より少し小	1					125	
48	SR001	04	F-2	V	純血系	大雑作	馬	骨節部一途取組	成駒	成駒より少し小	1					124	
49	SR001	08	T-16	V	純血系	大雑作	馬	骨節部一途取組	成駒	成駒より少し小	1					120	
50	SR001	05	A-10	V	純血系	大雑作	馬	骨節部一途取組	成駒	成駒より少し小	1					119	
51	SR001	05	A-8	V	純血系	大雑作	馬	骨節部一途取組	成駒	成駒より少し小	1					125	
52	SR001	05	D-11	V	純血系	大雑作	馬	骨節部一途取組	成駒	成駒より少し小	1	320+				129	

個数



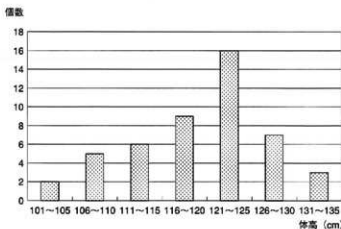
第493図 ウマの推定体高



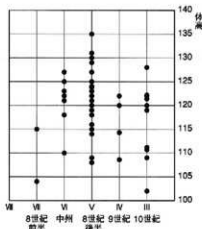
第494図 ウマ 時代別体高分布

表17 ウシの体高値一覧

番号	出土遺跡	遺物	年代	位置	式名	年	性別	備考	肩高の測定値 (cm)					肩高の算出値			肩高推定値 (cm)		
									全長 (GL)	肩高 (Shp)	肩幅 (Scp)	肩幅 (Scp)	肩幅 (Scp)	肩幅 (Scp)	算出値	算出値		算出値	
1	SR008	06-1	古	中層	子鹿骨	L 11470								130.0	110.0	82.0	101.1	126	
2	SR008	06-2	古	中層	子鹿骨	L 11470								400				125	
3	SR008	06-2	古	中層	子鹿骨	L 11470								400				126	
4	SR008	06-2	古	中層	子鹿骨	L 11470								422.0	120.0	85.0	101.0	120	
5	SR008	06-2	古	中層	子鹿骨	L 11470								85.0				121	
6	SR008	06-2	古	中層	子鹿骨	L 11470								74.0				122	
7	SR008	06-2	古	中層	子鹿骨	L 11470								85.0				122	
8	SR008	06-2	古	中層	子鹿骨	L 11470								72.0	60.0			124	
9	SR008	06-2	古	中層	子鹿骨	L 11470								90.0				127	
10	SR008	06-2	古	中層	子鹿骨	L 11470								72.0				128	
11	SR008	06-2	古	中層	子鹿骨	L 11470								77.0				124	
12	SR008	06-2	古	中層	子鹿骨	L 11470								127.4	86.8	46.7	74.5	74.0	126
13	SR008	06-2	古	中層	子鹿骨	L 11470								120.0				126	
14	SR008	06-2	古	中層	子鹿骨	L 11470								127.0	140.0	74.0	73.0	125	
15	SR008	06-2	古	中層	子鹿骨	L 11470								127.0	86.2	75.4		124	
16	SR008	06-2	古	中層	子鹿骨	L 11470								120.0				123	
17	SR008	06-2	古	中層	子鹿骨	L 11470								77.0				124	
18	SR008	06-2	古	中層	子鹿骨	L 11470								62.1				120	
19	SR008	06-2	古	中層	子鹿骨	L 11470								120.0	85.0	40.7	77.4	120	
20	SR008	06-2	古	中層	子鹿骨	L 11470								124.0	85.0	40.7	81.5	123	
21	SR008	06-2	古	中層	子鹿骨	L 11470								120.0	85.0	50.0	82.0	123	
22	SR008	06-2	古	中層	子鹿骨	L 11470								127.0	86.0			129	
23	SR008	06-2	古	中層	子鹿骨	L 11470								120.0	70.0	42.0		120	
24	SR008	06-2	古	中層	子鹿骨	L 11470								72.0				100	
25	SR008	06-2	古	中層	子鹿骨	L 11470								120.0				121	
26	SR008	06-2	古	中層	子鹿骨	L 11470								120.0				121	
27	SR008	06-2	古	中層	子鹿骨	L 11470								120.0	86.1	63.0		120	
28	SR008	06-2	古	中層	子鹿骨	L 11470								124.0	77.0	46.2		120	
29	SR008	06-2	古	中層	子鹿骨	L 11470								124.0	77.0	46.2		120	
30	SR008	06-2	古	中層	子鹿骨	L 11470								65.0				125	
31	SR008	06-2	古	中層	子鹿骨	L 11470								65.0				125	
32	SR008	06-2	古	中層	子鹿骨	L 11470								65.0				125	
33	SR008	06-2	古	中層	子鹿骨	L 11470								65.0				125	
34	SR008	06-2	古	中層	子鹿骨	L 11470								65.0				125	
35	SR008	06-2	古	中層	子鹿骨	L 11470								65.0				125	
36	SR008	06-2	古	中層	子鹿骨	L 11470								65.0				125	
37	SR008	06-2	古	中層	子鹿骨	L 11470								65.0				125	
38	SR008	06-2	古	中層	子鹿骨	L 11470								65.0				125	
39	SR008	06-2	古	中層	子鹿骨	L 11470								65.0				125	
40	SR008	06-2	古	中層	子鹿骨	L 11470								65.0				125	
41	SR008	06-2	古	中層	子鹿骨	L 11470								65.0				125	
42	SR008	06-2	古	中層	子鹿骨	L 11470								65.0				125	
43	SR008	06-2	古	中層	子鹿骨	L 11470								65.0				125	
44	SR008	06-2	古	中層	子鹿骨	L 11470								65.0				125	
45	SR008	06-2	古	中層	子鹿骨	L 11470								65.0				125	
46	SR008	06-2	古	中層	子鹿骨	L 11470								65.0				125	
47	SR008	06-2	古	中層	子鹿骨	L 11470								65.0				125	
48	SR008	06-2	古	中層	子鹿骨	L 11470								65.0				125	



第495図 ウシの推定体高



第496図 ウシ 時代別体高分布

表18 イヌの頭蓋骨一覧表

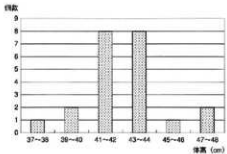
番号	犬種	性別	犬種	年代	頭蓋骨	測定部位	備考	頭蓋骨の諸測定							頭蓋骨の面積		測定 位置 (mm)
								長さ (mm)	高さ (mm)	後頭径 (mm)	後頭径 (mm)	後頭径 (mm)	後頭径 (mm)	後頭径 (mm)	P4		
															長さ (mm)	高さ (mm)	
1	SHIBUZZU	♂	10	10	非繁殖期	頭蓋骨	1	132.0	106.0	26.0	66.0	45.0	40.0	8.0	42		
2	SHIBUZZU	♂	10	10	非繁殖期	頭蓋骨	1	136.0	108.0	26.0	66.0	45.0	40.0	8.0	42		
3	SHIBUZZU	♂	10	10	非繁殖期	頭蓋骨	1	125.3	105.7	25.0	65.0	42.0	38.0	8.0	43		
4	SHIBUZZU	♂	10	10	非繁殖期	頭蓋骨	1	122.0	101.2	23.2	64.5	37.0	37.0	7.8	42		
5	SHIBUZZU	♂	10	10	非繁殖期	頭蓋骨	1								42		
6	SHIBUZZU	♂	10	10	非繁殖期	頭蓋骨	1								42		

表19 イヌの下顎骨一覧表

番号	犬種	性別	犬種	年代	頭蓋骨	測定部位	備考	下顎骨の諸測定										測定 位置 (mm)	
								長さ (mm)	高さ (mm)	後頭径 (mm)	後頭径 (mm)	後頭径 (mm)	後頭径 (mm)	後頭径 (mm)	後頭径 (mm)	後頭径 (mm)	後頭径 (mm)		後頭径 (mm)
1	SHIBUZZU	♂	10	10	非繁殖期	下顎骨	1	100.0	22.0	22.0	36.0	11.0	10.0	6.0	5.4	-			
2	SHIBUZZU	♂	10	10	非繁殖期	下顎骨	1									-			
3	SHIBUZZU	♂	10	10	非繁殖期	下顎骨	1	100.0	22.0	22.0	36.0	11.0	10.0	6.0	5.4	-			
4	SHIBUZZU	♂	10	10	非繁殖期	下顎骨	1	100.0	22.0	22.0	36.0	11.0	10.0	6.0	5.4	-			
5	SHIBUZZU	♂	10	10	非繁殖期	下顎骨	1									-			
6	SHIBUZZU	♂	10	10	非繁殖期	下顎骨	1									-			
7	SHIBUZZU	♂	10	10	非繁殖期	下顎骨	1									-			
8	SHIBUZZU	♂	10	10	非繁殖期	下顎骨	1									-			
9	SHIBUZZU	♂	10	10	非繁殖期	下顎骨	1									-			
10	SHIBUZZU	♂	10	10	非繁殖期	下顎骨	1	100.0	22.0	22.0	36.0	11.0	10.0	6.0	5.4	-			
11	SHIBUZZU	♂	10	10	非繁殖期	下顎骨	1									-			
12	SHIBUZZU	♂	10	10	非繁殖期	下顎骨	1									-			
13	SHIBUZZU	♂	10	10	非繁殖期	下顎骨	1									-			
14	SHIBUZZU	♂	10	10	非繁殖期	下顎骨	1									-			
15	SHIBUZZU	♂	10	10	非繁殖期	下顎骨	1									-			
16	SHIBUZZU	♂	10	10	非繁殖期	下顎骨	1									-			
17	SHIBUZZU	♂	10	10	非繁殖期	下顎骨	1									-			
18	SHIBUZZU	♂	10	10	非繁殖期	下顎骨	1									-			
19	SHIBUZZU	♂	10	10	非繁殖期	下顎骨	1									-			
20	SHIBUZZU	♂	10	10	非繁殖期	下顎骨	1									-			
21	SHIBUZZU	♂	10	10	非繁殖期	下顎骨	1									-			
22	SHIBUZZU	♂	10	10	非繁殖期	下顎骨	1									-			
23	SHIBUZZU	♂	10	10	非繁殖期	下顎骨	1									-			
24	SHIBUZZU	♂	10	10	非繁殖期	下顎骨	1									-			
25	SHIBUZZU	♂	10	10	非繁殖期	下顎骨	1									-			
26	SHIBUZZU	♂	10	10	非繁殖期	下顎骨	1									-			

表20 イヌの四肢骨体高値一覧表

番号	犬種	性別	犬種	年代	頭蓋骨	測定部位	備考	四肢骨の体高値 (mm)		
								長さ (mm)	高さ (mm)	後頭径 (mm)
1	SHIBUZZU	♂	10	10	非繁殖期	骨	1	145.0	26.0	22.0
2	SHIBUZZU	♂	10	10	非繁殖期	骨	1	133.0	14.4	11.2
3	SHIBUZZU	♂	10	10	非繁殖期	骨	1	118.0	13.7	10.9
4	SHIBUZZU	♂	10	10	非繁殖期	骨	1	115.0		10.0
5	SHIBUZZU	♂	10	10	非繁殖期	骨	1	106.0		10.0
6	SHIBUZZU	♂	10	10	非繁殖期	骨	1	106.0		10.0
7	SHIBUZZU	♂	10	10	非繁殖期	骨	1	102.0		10.0
8	SHIBUZZU	♂	10	10	非繁殖期	骨	1	104.7	14.4	10.0
9	SHIBUZZU	♂	10	10	非繁殖期	骨	1	115.0	26.0	11.0
10	SHIBUZZU	♂	10	10	非繁殖期	骨	1	106.0	26.4	10.2
11	SHIBUZZU	♂	10	10	非繁殖期	骨	1	101.0		10.0
12	SHIBUZZU	♂	10	10	非繁殖期	骨	1	101.0		10.0
13	SHIBUZZU	♂	10	10	非繁殖期	骨	1	101.0		10.0
14	SHIBUZZU	♂	10	10	非繁殖期	骨	1	101.0		10.0
15	SHIBUZZU	♂	10	10	非繁殖期	骨	1	101.0		10.0
16	SHIBUZZU	♂	10	10	非繁殖期	骨	1	101.0		10.0
17	SHIBUZZU	♂	10	10	非繁殖期	骨	1	101.0		10.0
18	SHIBUZZU	♂	10	10	非繁殖期	骨	1	101.0		10.0
19	SHIBUZZU	♂	10	10	非繁殖期	骨	1	101.0		10.0
20	SHIBUZZU	♂	10	10	非繁殖期	骨	1	101.0		10.0



第49図 イヌの推定体高





図版75 動物遺体1

1~4. ウシ (1右下顎骨側面 2右下顎骨上面) 3・4角芯 5・6. ウマ左下顎骨 (5側面 6上面)



図版76 動物遺体 2

1・3・5・7・8・10・12. ウシ (1左肩甲骨 3左上腕骨 5左腕尺骨 7右大腿骨 8右脛骨 10左中手骨 12右中足骨)  
 2・4・6・9・11・13. ウマ (2右肩甲骨 4左上腕骨 6右橈骨 9左脛骨 11左中手骨 13右中足骨)



1a



1b



2a



2b

5cm

図版77 動物遺体 3

1・2. イヌ頭蓋骨 (a. 上面 b. 左側面)



図版78 動物遺体 4

1～7. ネコ (1 右肩甲骨 2 左橈骨 3 右上腕骨 4 右橈骨 5 左尺骨 6 左大腿骨 7 左脛骨)

8～12. アナグマ (8 左下顎骨 9 右下顎骨 10 右大腿骨 11 左大腿骨 12 右脛骨)

13～19. イヌ (13・14 左下顎骨 15 右下顎骨 16 右尺骨 17 左脛骨 18 右上腕骨 (骨折) 19 右脛骨 (骨折))



1



2



3

5cm

図版79 動物遺体5

1・2. イノシシ右下顎骨 3. イノシシ左右下顎骨



図版80 動物遺体 6

1～10. シカ (1. 左上顎骨 2. 頭蓋骨 3. 左下顎骨 4. 右下顎骨 5. 右中足骨 6. 左中手骨 7. 角 8. 左大跗骨  
9. 右寛骨 10. 右橈骨)



図版81 動物遺体 7

1. クイナ右中足骨 2・3. ニワトリ(2右大腿骨 3左脛骨) 4. ヤマドリ/キジ左脛骨 5. カモ右上脛骨 6. カラス  
 左上脛骨 7. ガン大右尺骨 8. カワウ右上前骨 9・10. サギ類(9. 右大腿骨 10. 左大腿骨) 11. アオサギ左脛骨  
 12・13. ツル(12左橈骨 13左尺骨) 14. クロダイ左歯骨 15. プリ右歯骨 16・17. マグロ類(16椎骨 17右主體蓋骨)  
 18~27. スッポン(18頭蓋骨 19右上脛骨 20左上脛骨 21左肩甲骨 22左腕骨 23右腕骨 24内腹甲骨 25・26肋骨板 27下腹甲骨)

# 徳島県内出土の日本古代銭貨

大阪市立大学  
栄原 永遠男

## 1. 出土事例の集成

2008年3月までに徳島県内で出土した日本古代銭貨については、これまでに以下のような集成がなされている。

- (a) 辻 佳伸「徳島県下の出土状況」(『出土銭貨』創刊号、1994年4月)
- (b) 永井久美男「徳島県下の出土銭」(徳島県海部郡海南町教育委員会「阿波海南 大里出土銭—中世期大量埋蔵銭の調査報告書—」1994年9月)
- (c) 山内英樹「阿波国」(出土銭貨研究会「畿内・七道からみた古代銭貨」2000年9月)
- (d) 柴田圭子「四国地方出土の和同開珎」(研究集会「和同開珎をめぐる史的検討(2)」発表要旨と参考資料、2008年3月)

これらに集成されている出土例に、観音寺遺跡出土の出土例を加えて示すと、表1のようになる。これによって、古代の阿波国における古代銭貨の普及の実態について考えたい。そのためには、各事例の出土状況を確認しておく必要がある。

## 2. 出土事例の検討(表21)

①は、1961年(昭和36)1月に、南面する緩傾斜地の中腹の葡萄畑の耕作中に偶然発見されたもので、薄く木炭を敷いた上に凝灰岩製の蔵骨石櫃を置き、その上に人頭大の塊石を被覆として置いていたという。報告書において、蔵骨石櫃の中にあつたと明記されているのは、熟年男子の洗骨1体分、金銅製大刀1振である。他に副葬品として延喜通宝13枚、小刀子2口、砥石1個があつたが、これらが蔵骨石櫃の中にあつたとは記されていない<sup>93</sup>。しかし、問題の延喜通宝が、仮に蔵骨石櫃の外にあつたとしても、この古墓に關係して埋納されたことはたしかであろう。

②の中庄東遺跡は、郡衙との関連が指摘されている遺跡であるが、和同開珎は、1998年度の第1次調査において、7C地区の大型不明遺構SX2009を切る土坑SK2076から出土した。報告書では、「遺構北壁沿い中位、推定第8層埋土中から表面を上に向けた状態で出土し」、「柱穴の地溝に際し人為的に埋納された可能性が考えられる」とされ、SK2076の遺物の中には、SX2009の遺物が混入したものが含まれている可能性が指摘されている<sup>94</sup>。和同開珎は、SX2009から出土した8世紀後葉を中心とする時期の青銅製の丸柄や環座金具などともに廃棄されていた可能性がある<sup>95</sup>とされている。

③については、(a)では、調査者谷尻人氏からの教示として、「削平を受けた古代墓の横で」出土したもので、「もとは古代墓に副葬されていたものと考えられる」としている<sup>96</sup>。また(b)では、「後世の削平によって上部がかなり壊された」古代墓の「東側から皇朝十二銭の寛平大寶1枚と延喜通寶8枚のほか不明銭13枚」が出土した、不明銭は「形状などからみて同じ寛平大寶か延喜通寶と推察される」、これらの銭貨は「墓が壊された時に動かされたものと思われる」などとしている<sup>97</sup>。

④の出土状況は不明である。

⑤⑥は、一般国道192号徳島南環状道路・徳島環状線国府工区改築事業に伴う発掘調査における出



表21 徳島県内出土の日本古代貨幣

遺跡名	所在地	出處	無文銀鏡	官本鏡	和同開珎	和同開珎	開元通宝	太平通宝	万年通宝	神功開元	隆平通宝	寛元通宝	承和通宝	長安大宝	建武通宝	貞觀通宝	寶曆通宝	延喜通宝	乾元通宝	不明	
① 徳島谷古墓	鳴門市大塚町坂東字徳島谷101	坂野部																13			
② 中庄東遺跡	三好郡東みよし町内庄	美馬郡			1																
③ 吐賣山千塚群	麻績郡鳴島町敷田字井原1391-2他	麻績郡																6	1	13	
④ 阿波阿波路(6次)	徳島市西町観音寺字神所	名方郡																1			
⑤ 観音寺遺跡(徳島州境扶道路)	徳島市西町観音寺	a																			
		b	名方郡																1		
		c																			
		d																		1	
⑥ 観音寺遺跡(徳島県扶細間石工区)	徳島市西町観音寺	a	名方郡						1										1		
		b																			
		c																			
⑦ 庄通路(衣笠内殿地区)	徳島市庄町1丁目	名方郡						1											1		
⑧ 庄通路(徳島大学蔵本門通地区)	徳島市出町1丁目	名方郡																		1	
⑨ 一宮山上鏡	徳島市一宮町東丁	名方郡						1													
⑩ 大塚山十鏡	海部郡海情町人黒字浜崎105	名方郡																			
		那賀郡																			
計(個数)					1			4	2	4	2	1	1	1	1	1	1	25	2	13	
計(遺跡数)					1			4	1	4	1	1	1	1	1	1	1	5	2	1	
⑨、⑩を除く計(個数)					1			2		2		1	1	1	1	1	1	25	2	13	
⑨、⑩を除く計(遺跡数)					1			2		2		1	1	1	1	1	1	5	2	1	

土例である。出土した7点はそれぞれ別箇所から出土しており、数枚が一括して出土した場合はない。そこでa以下の記号で区別する。⑤(1997、8年出土)のうち、a承和昌宝は、平安時代～中世のⅡ層から検出され、b貞観永宝、c延喜通宝、d延喜通宝は、いずれも包含層からの検出であるという。

⑥(2005年出土)のa万年通宝とb延喜通宝は、10～11世紀のⅢ層からの出土、c乾元大宝は、中世のⅡ層からの出土である。

⑦は、平安時代の水路埋土中より出土したとされ<sup>8)</sup>、この地区は「名東郡衛の一角を占めていた可能性」があるとされている<sup>9)</sup>。

⑧は、調査担当者福家清司氏からの教示として、平安時代の水路から出土した、とされている<sup>10)</sup>。

⑨⑩の2例は、中世の大量埋蔵銭の中に含まれていたものである<sup>11)</sup>。

### 3. 古代銭貨の普及状況

#### 〔時期〕

以上にもとづいて、阿波国の古代における銭貨の普及状況を考えたい。その場合、各銭貨の発行時期ではなく、埋没時期に注目すべきである。表1の徳島県における古代銭貨の出土例のうち、古代に埋没したのは、①②③④⑥ab⑦⑧の各事例である。その他の⑤a～d、⑥c、⑨⑩は、中世以降の埋没であるので、古代の普及状況に結びつけることは難しい。

まず、8世紀以前の銭貨で出土しているのは、和同開珎と万年通宝のみである。今のところ、無文銀銭・富本銭・和同銀銭・神功開宝の出土はない。②の和同開珎は、SX2009の遺物が混入したものとすると、埋没時期は8世紀後葉となる。またSX2009を切って作られたSK2076に伴うものとなると、これよりさらに後の時期となる。

万年通宝は、4カ所から出土していて注目される。しかし、⑨⑩は中世における埋没であり、古代における普及を示すものではない<sup>12)</sup>。⑥aは10世紀の地層から、⑦は平安時代の水路埋土から出土している。いずれも、8世紀に発行された銭貨ではあるが、発行時期における普及の史料としてではなく、埋没時期の史料として扱う必要がある。

9世紀以降の銭貨では、隆平永宝・富寿神宝・長年大宝・鏡益神宝の出土はないが、富寿神宝・承和昌宝・貞観永宝・寛平大宝・延喜通宝・乾元大宝が出土している。しかし、これらの出土例のうち、⑤a～d、⑥cは中世以降の埋没である。

古代に埋没した事例は、残る①③④⑥b⑧である。①延喜通宝、③寛平大宝・延喜通宝、④延喜通宝、⑥b延喜通宝、⑧乾元大宝である。③は寛平大宝(890年発行)を作うが、延喜通宝発行(907年)以後の埋没である。この点では①④も同様である。⑥bは10世紀の地層から、⑧は平安時代の水路から出土している。

以上によると、8世紀における普及の可能性を示すのは②の和同開珎のみということになる。この②の和同開珎の場合も、発行後かなりの時間を経過して埋没したことに注意する必要がある。その他の①③④⑥ab⑦⑧は、いずれも10世紀以降の埋没であった。

したがって、阿波国における古代銭貨の普及は、8世紀も後半すぎからはじまったとみられるが、孤立的、点的な状態にとどまったと推定される。それがやや普及しはじめるのは、9世紀の終わり近くからで、それが10世紀になって埋没したとみられる。

#### 〔普及の状況〕

つぎに、出土遺跡の性格について検討したい。②⑦⑧については、それぞれ美馬郡家、名東郡家との関連が想定されている。また、⑤⑥は阿波国府の近辺と想定されており、④も同様である。したがって、①③以外は、官司の近隣から出土していることになる。

このうち②は、上記のように、今のところ8世紀における普及を示す唯一の事例であるが、それが美馬郡家と関連する可能性があることは注意される。阿波国における古代銭貨の普及は、郡家関係者を中心にはじまったことを示しているのではなかろうか。また、④⑥ ab ⑦⑧などの古代における埋没事例が、阿波国府、名東郡家と関連していることは、9世紀以降の銭貨の普及も、国府や郡家の関係者を中心に進められたことを示している。

①③は、ともに墳墓からの出土であるが、②も「柱穴の地蹟」に用いられた可能性が指摘されている。これらは、古代の阿波において、銭貨が祭祀などに使用されていたことを示すものである。

#### 〔地域分布〕

古代における埋没事例は、①板野郡、②美馬郡、③麻植郡、④～⑧名方郡である。このうち②を除く他はみな吉野川口下流地域に位置している。10世紀以降の銭貨普及は、この地域を中心に展開したことを示している。

古代の阿波国における銭貨普及を示すもっとも早い事例である②の出土地点が、阿波国のもっとも西の山間部に位置する美馬郡のうちに含まれることは興味深い<sup>\*)</sup>。このことは、阿波国における銭貨の普及が、流通経済の発展にかならずしも依拠することなく、郡家関係者による個別的な所持が契機となっていることを示している。

#### 4. むすび

本稿は、出土事例から古代銭貨の普及の実態を探る試みであった。それには、個々の出土事例の状況が十分に把握されている必要がある。しかし、それが明確でない事例があったため、十分な検討ができなかった。今後、古代銭貨の出土例が増加して行くであろうから、それを待って本稿での見直しを再度検討したい。

本稿では、対象を古代銭貨に絞ったが、古代銭貨にかぎらず、普及の実態を把握するためには、出土状況、出土層位、伴出遺物、銭貨そのものの形状・特徴その他考古遺物としての情報を必要とする。今後、これらに配慮した精度の高い情報の提示を期待したい。

#### 註

- \* 1 末永雅雄「榎穀谷出土蔵骨器関係資料調査概要」、島 五郎「平安時代初頭と推定せられる蔵骨器出土の榎穀谷人骨について」（以上ともに「徳島県文化財調査報告書—榎穀谷出土蔵骨器関係資料—」第4集、1962年7月）
- \* 2 徳島県教育委員会「中庄東遺跡 緊急地方道路整備事業—県道出口大刀野線—に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」（徳島県埋蔵文化財センター調査報告書 第54集、2005年3月）
- \* 3 柴田圭子「四国地方出土の和同開珎」（前掲）
- \* 4 辻 佳伸「徳島県下の出土状況」（前掲）
- \* 5 永井久美男「徳島県下の出土銭」（前掲）

- \* 6 註4と同じ
- \* 7 徳島市教育委員会『第6回埋蔵文化財資料展 庄遺跡の人々のくらしと文化』（1985年11月）
- \* 8 註4と同じ
- \* 9 徳島県海部郡海南町教育委員会『阿波海南大里出土銭—中世期大量埋蔵銭の調査報告書—』（1994年9月）、吉見哲夫「一宮出土古銭の全貌」（『ふるさと阿波』22、1959年、阿波郷土会『再建40年記念誌 ふるさと阿波 第1号～第50号』1990年12月）
- \* 10 両者ともに万年通宝が含まれていることは、単なる偶然ではないかも知れない。
- \* 11 三好郡が美馬郡から分立するのは貞観2年（860）である（『日本三代実録』貞観2年3月2日壬子条）。

徳島県埋蔵文化財センター調査報告書 第71集

観音寺遺跡(Ⅳ)

道路改築事業(徳島環状線|国府工区)関連埋蔵文化財発掘調査報告書

〈第2分冊 観察表・写真図版編〉

発行日 平成20(2008)年3月25日

編集 財団法人 徳島県埋蔵文化財センター  
〒779-0108 徳島県板野郡板野町大伏字平山86番2  
TEL (088) 672-4545 FAX (088) 672-4550

発行 徳島県教育委員会  
財団法人 徳島県埋蔵文化財センター

印刷 株式会社教育出版センター